

7月は梅雨の影響で雨が多く病害が発生しやすい時期であることに加え、梅雨明け以降は害虫の発生も増加してくるため重要な防除時期です。この時期は非常に暑いこともあってか、ごくまれに防護服を着用せず農薬散布をされている方を見かけることがあります。農薬の適正使用・事故防止の観点からも、農薬を散布する際は必ず適切な装備を着用するとともに、熱中症対策にも十分注意して水分補給や休憩をこまめに行う等してください。

「果樹全般」

●果樹カメムシ類

本年は果樹カメムシ類の越冬量が多く、5月上旬から樹園地への越冬世代の飛来が確認されており、8月上旬ごろまでは飛来が続くことが懸念されます。果樹カメムシは集合フェロモンで仲間を引き寄せる性質があるため、初期防除が非常に重要です。引き続き園内をよく観察し、飛来が確認されたら薬剤による防除を行ってください。なお、防除薬剤や注意点については先月号の記事をご参考ください。

「露地カンキツ」

●黒点病

6月号でも述べましたが、本病の発生を抑えるポイントは、①伝染源の除去、②散布した薬剤の効果が低くなる「累積降雨量」を超える前の薬剤散布の2点です。

①伝染源の除去

剪定枝や切り株が園内に放置されている場合、伝染源となるため速やかに処分してください。すぐに除去が難しい場合であっても、ポリ袋等をかぶせて雨に当たらないようにすることで菌の増殖・飛散を防止できます。枯れ枝については一度除去しても生育期間中を通して発生しますので、見つけ次第除去・処分してください。

②薬剤散布

薬剤は、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）、マンネブ水和剤（エムダイファー水和剤）を散布して下さい。

6月にマシン油乳剤を加用して散布した場合は散布後の累積降雨量 300～400mm、マシン油乳剤（ハーベストオイル等）を加用せずに散布した場合は散布後の累積降雨量 200～250mmを目安に追加散布を行って下さい。なお、マシン油乳剤は、7月以降に使用すると果実の糖度低下や果実腐敗の原因となることがあるため、7月以降は使用しないで下さい。その後も、

散布後の累積降雨量が 200～250mm を超えたら追加散布を行います。雨が少なく累積降雨量の目安に達しない場合でも、前回の散布から 1 カ月を目安に追加散布して下さい。

また、累積降雨量は園地ごとに異なるため、可能であれば園地ごとに簡易雨量計を設置して確認して下さい。目安の累積降雨量を超えそうな場合は、雨の合間を縫って、薬剤を散布して下さい。

●かいよう病

本病は風雨によって周囲に感染が広がります。梅雨期間中は本病の重要な防除時期であるため、本病にかかりやすい品種（中晩柑類、高糖系温州）では 7 月上旬頃に薬剤を散布して下さい。他の温州ミカンでも、昨年本病が発生した園、風当たりが強い園、幼木や高接ぎ園では発生しやすいため、同様に薬剤を散布して下さい。コサイド 3000 2,000 倍、ムッシュボルドーDF 500 倍、クプロシールド 1,000 倍等の銅剤を散布して下さい。なお、銅剤の成分の銅による薬害（スターメラノーズ）を発生しにくくするため、必ずクレフノン 200 倍を加用して下さい。

台風や梅雨前線等の影響で強風雨が予想される場合は、7 日前～前日までに必ず上記の薬剤を散布して下さい。強風雨後に薬剤を散布した場合は、事前に薬剤を散布した場合と比べ防除効果が劣るので、事前散布を徹底して下さい。

また、ミカンハモグリガの幼虫による食害痕は本病菌の侵入口となるため、上記のように発生しやすい園ではミカンハモグリガの防除も徹底して下さい。

●ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

7 月中旬は、ミカンサビダニとチャノキイロアザミウマの防除適期です。コテツフロアブル 4,000 倍、アグリメック 2,000 倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍のいずれかを散布すると両者を同時防除できます。

●カイガラムシ類

7 月中下旬は近年被害が多いマルカイガラムシ類の第二世代幼虫や、ルビーロウムシの若齢幼虫の発生時期です。特にマルカイガラムシ類はこの時期に防除が不十分であると秋以降に第三世代が増加し果実被害を生じます。昨年果実被害が出た園では必ずトランスフォームフロアブル 2,000 倍またはエルサン乳剤 1,000 倍による防除を行ってください。なお、散布の際には散布ムラが生じないように葉裏や枝、幹までしっかりと散布してください。

●ゴマダラカミキリ

7月は、雌成虫の産卵時期および幼虫の食入時期（7月上旬～8月上旬頃）になります。モスピラン SL 液剤 2,000 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、ダントツ水溶剤 2,000 倍等を散布して下さい。なお、地際部や幹が太い主幹部に産卵するので被害が目立ちますが、成虫は葉や緑枝を好んで摂食するため、薬剤は樹全体に、散布ムラが無いように散布して下さい。

園地で見つけた成虫や幼虫は可能な限り捕殺します。幼虫が既に木質部に食入しており捕殺できない場合は、食入口の木くず等を除去してから園芸用キンチョール E やロビンフッド等で対応して下さい。

「ハウスミカン」

●アザミウマ類

園内外の雑草等で増殖したアザミウマ類の成虫が、ハウス内に侵入して果実を加害します。そのため、まず、果実の着色期の前に園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドに防虫ネットや光反射資材を設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防いで下さい。既に設置している園では、ネットに破れ等がないか確認して下さい。

アザミウマは種類毎に効果の高い薬剤が異なります（表 1）。収穫前日数に注意しながら発生種に応じた薬剤を選択して下さい。種類の確認方法が不明な場合は、各地域の指導機関（農業振興センター等）に問い合わせてください。

表 1 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

アザミウマの種類	薬剤名	IRAC※ コード	希釈倍率	収穫前日数
ミカンキイロアザミウマ 及びネギアザミウマ	ディアナWDG	5	10,000 倍	前日まで
	スピノエースフロアブル	5	4,000 倍	7 日前まで
	ファインセーブフロアブル	34	2,000 倍	7 日前まで
	アベンジャーフロアブル	34	2,000 倍	7 日前まで
ミカンキイロアザミウマ	コテツフロアブル	13	2,000 倍	前日まで
ネギアザミウマ	ハチハチフロアブル	21A	2,000 倍	前日まで

「不知火（施設栽培）」

●汚れ果症

施設栽培の‘不知火’では、赤道面から果頂部に集中して黒点症状を生じる「汚れ果症」が問題となります。本症は、高湿度条件で発生が多くなるため、換気等の湿度対策を十分に行って下さい。また、薬剤ではマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）600 倍が有効です。露地栽培の黒点病防除と同様に、前回散布から累積降雨量 250mm または散布後 1 カ月を目安に散布して下さい。

ナシ

●黒星病

今年の春先の本病の発生は平年並でしたが、6月下旬～7月上旬頃は果実が黒星病に最も感染しやすい時期なので、対策を徹底する必要があります。スコア顆粒水和剤等のDMI剤を必ず散布して下さい。

なお、①本病が葉に発生している園、②6月下旬～7月上旬の薬剤散布以降も降雨が続く場合、③毎年収穫時期に被害が発生している園では、7月中旬～8月中旬にも再度DMI剤を散布して下さい。

●ナシヒメシンクイ

本年はナシヒメシンクイ越冬世代の発生が多く、ナシ園の被害が増加するおそれがあります。既に交信かく乱剤を設置されている方も多いかと思いますが、発生が多いと園外から交尾済みの雌が侵入して被害が発生する確率が高くなるため、薬剤を10～14日間隔で散布してください。交信かく乱剤を設置していない園地では、散布間隔が10日以上開かないようにしてください。

なお、‘幸水’では果実に薬液の汚れが目立ちやすいため、汚れの少ないフロアブル剤を使用して下さい。

●ハダニ類

梅雨明け頃以降に密度が高くなるため、発生に注意して、薬剤は低密度時から散布ムラが無いように丁寧に散布して下さい。なお、収穫時期が近いと、果実の汚れが少ないコロマイト水和剤2,000倍やスターマイトフロアブル2,000倍等を散布して下さい。

●ハウスナシの収穫後の薬剤防除

収穫終了後は、黒星病や炭疽病等を対象としてデランフロアブル1,000倍やキノンドーフロアブル1,000倍等の保護殺菌剤を散布して下さい。ハダニ類等の害虫の発生が多い園では、殺ダニ剤を加用して下さい。

ただし、近隣に収穫が終わっていないナシ園がある場合は、薬液が収穫前のナシにかからないよう、飛散に注意し散布して下さい。

「ブドウ」

●枝膨病

袋掛け後の防除をまだ行っていない園では、ストロビードライフフロアブル 2,000 倍を早急に散布して下さい。

●べと病

曇雨天が続くと発生が多くなります。本病は、発生が多くなると抑えることが難しいため、少発生時からの薬剤散布を励行して下さい。

袋掛け後にボルドー液（I C ボルドー48Q、66D）50 倍を散布して下さい。なお、I C ボルドーにアビオン E 1,000 倍を加用すると防除効果が向上します。薬剤の散布間隔は 20 日以上空かないようにして下さい。

「キウイフルーツ」

●果実軟腐病

せん定枝、枯枝、前年の結果枝等は伝染源となるため、園外に持ち出して処分して下さい。フロンサイド S C 2,000 倍（収穫 30 日前まで）、アリエッティ水和剤 600 倍（幼果期まで（但し、収穫 120 日前まで））等を散布して下さい。薬剤は、果実だけでなく枝葉にも薬液が十分付着するよう棚上からも散布して下さい。なお、アリエッティ水和剤は収穫前日数が長いので、収穫予定時期を考慮して使用して下さい。

●すす斑病

6 月に引き続き、7 月も果実への感染を防ぐための重要な防除時期です。ベンレート水和剤 2,000 倍、ストロビードライフフロアブル 2,000 倍等を散布して下さい。果実だけでなく、葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液がかかるよう丁寧に散布して下さい。また、枝が遅くまで伸長する樹では発生が多くなるため、適切な新梢管理を行って下さい。